

Métier of the clinical philosophy

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために

Vol.4 1999秋の号

特集：哲学プラクティス

- 第5回哲学プラクティス国際学会に参加して 中岡成文 4
子どものための哲学・子どもとともにする哲学 寺田俊郎 8
「ともに考える」ための道具——"Socratic Dialogue"の経験から 堀江 剛 14
思考の現場——哲学プラクティスと臨床哲学 本間直樹 19
二つの国際学会のホスピタリティについて 仁平雅子 24
ソクラティック・ダイアローグ in Osaka 馬嶋裕・大北全俊 25

「聞き取り」としてのセクシュアリティ——日本倫理学会におけるその位置 栗田隆子 27
臨床哲学的余白 30

Vol.4 Autumn 1999

大阪大学文学部臨床哲学・倫理学研究室

参加した。

個別セッションは、大きく「哲学カウンセリング・哲学コンサルティング」「子どものための哲学」「ソクラティック・ダイアログ」の3つのサブテーマに分けられ、私たちもそれぞれの分野に手分けして偏りなく参加するよう心がけた。今回のメチエでは、その報告を特集する。

第5回哲学プラクティス 国際学会に参加して 中岡成文

哲学プラクティス（哲学カウンセリング）の国際学会が今年はオックスフォード大学で開かれた。数えて第5回目の今回、大会を主催したのは「コンサルタント哲学者協会」を名乗るイギリスのグループである。かれらはとくに子どもを対象とした哲学教育の可能性を熱心に追求している。日本からは、昨年の初参加に引き続き、大阪大学大学院文学研究科から私を含めて5人が参加した。本大会の前に、「ソクラテ斯的対話」を習得するワークショップがブレ・カンファランスとして開かれたので、ヨーロッパでは有力な方法論とされているこの「対話」にも触れてみた。ブレ・カンファランスは7月24日から26日までオックスフォード大学のウォダム・カレッジで開かれた。カレッジというのは大学（ユニヴァーシティ）を構成する単位であり、学寮と訳すらしい。がっしりした造りの門をくぐると、右手にある門衛の部屋で、割り当てられた居室の鍵をもらう。ふだんの住人で、いまは夏休みで帰省中であろう学生たちにかわり、寝泊まりしながら、ワークショップや講演に臨むのである。なお、本大会では、ウォダムから歩いて5分ほどのところにある、ケブル・カレッジも使用された。

「フィロソフィカル・ディナー」にて

ソクラテ斯的対話——ファシリテーター・ワークブルな問い・定義

ソクラテ斯的対話について詳細は他の報告に委ねるが、私の気づいたことも若干述べさせていただきたい。

どんな討論でもそうだが、この「対話」ではとくに、ファシリテーター（進行役）の手腕が重要である。すべての参加者に十分自己主張させながら、他のメンバーの言い分にも耳を傾けることを要請し、勝手な発言に対しては厳しくディシプリン（規律）を徹底させなければならない。

参加者はいったん発言すれば、補足説明の要求や修正意見、反論の十字砲火に耐えなければならない。ファシリテートするオランダのボルテンもその例外ではない。すでにカウンセラーとして自立し、「対話」の進行役を経験した参加者も多いので、ボルテンの対話のさばき方に対しても、遠慮のない批判があちこちから飛んでくる。このまま先には進めないとかれが判断すると、対話の進め方（「戦略」）についての対話、つまりメタ・ダイアローグに切り替えられる。

全員の出した事例の中から、今回の「対話」（「理解と誤解」がテーマ）の焦点となる事例をひとつにしぼり、ついでその事例

と関連した哲学的な「問い」もひとつにしぼる。知的にスマートな事例や問いはいらないと、繰り返しボルテンは注意した。みんながそれぞれの立場からいろんなことがいえるシンプルな事例、作業しやすい(ワーカブルな)問いがいいのだと。しばしばみんなの議論がかみ合わないことがあるが、突き詰めていくと、けっきょく「理解」とか「誤解」という言葉についての理解が、人によってまちまちだかららしいとわかる。そこで、「理解」ないし「誤解」をまず定義しようという提案がノルウェーのオラフから出された。しかしボルテンはこれを却下した。「机の上で作業するのに、<机とは何か>を定義する必要はあるか。ないだろう」。オラフの反論「いや、哲学者としてはその定義は必要だ」。ボルテンの再反論「そんなことはない、机はそれとして具体的に指し示せれば十分だ」。オラフの再々反論「それなら、「問い」のひとつとして誰かが提案した「理解とは何か」はどうだ。これは、あなたが不必要だという、定義を求める問いではないのか」。オラフの指摘は論理的にはかなり核心をえぐっていたと思うが、ソクラテス的対話のリズムとは相容れないのも確かなようだ。「対話」は意味そのものを求心的に掘り下げることが狙わず、むしろ参加者の共同作業(ワーク)に資する「ワーカブル」な手段のみを要求するらしいから。ともかく、ボルテンはファシリテーターの権限でこの議論を打ち切り、定義抜きで「対話」を続けることに決めた。

本大会始まる

7月27日から哲学プラクティスの第5回国際学会が開かれた。参加者全員が集まる(プリーナリーな)講演以外は、6つの会場に分かれてセッションが持たれた。日

本から行った私たちは、できるだけ分散して、数多くの講演・ワークショップに触れるように努めた。

主催者を代表してマリス(Dr. Karin Murriss)が開会の辞を述べた。彼女はみんながファーストネームでカリンと呼んでいるが、オランダ出身らしい。オランダの哲学プラクティス協会のイギリス支部が近年独立してイギリス協会となった、その中心メンバーのひとりである。

午後6時より、オックスフォード市庁舎でレセプション。市庁舎の受付係が、「市長は来られなくなりましたが、みなさんはかまわず会場に行って、用意してあるワインをどんどんやってくれ」というのでびっくりしたが、オックスフォード流(?)の無骨なジョークと判明。ワインを片手に、昨年ドイツで顔なじみになった人々とあいさつを交わす。見回すと、昨年とはかなりの割合で顔触れが入れ替わっている。発表者を見ても、地元イギリスは別として、オランダ人が多く、ドイツ人はほとんどいない。とくに、国際哲学プラクティス協会の会長であるG・アーヘンバッハが今年欠席したのは、意外だった。初対面の人としては、香港出身でカナダ・トロントの病院に勤めるS・チャンに紹介された。彼はガン専門のソーシャル・ワーカーとして長年患者さんや家族と接してきて、哲学的な問題の大

切さを痛感し、それで現在ウェールズ大学で「時間と死」についての博士論文に取り組んでいるのだという。レセプションのあとはまたウォダム・カレッジに戻って、敷地内(!)のバーで、美しいイングランドの夏の夜を愛でた。

講演のうち、印象に残ったものをいくつか紹介したい。まず、R・スミスの企業コンサルタントに関する講演。欧米では、哲学者が企業コンサルティングをやる例は少なくない。哲学者が企業家にいったい何を言えるのかと懐疑的になる人も多いだろうが、スミスによると、企業のトップたちは、ふだんはお互いの失敗をあげつらうのに忙しく、じっくり話を交わす機会がまったくない。哲学者が介入して「対話」をするように仕向け、管理者たちがお互いに、また部下の者たちに対して接するその態度をより liberalize するだけでも、十分意味があるということだった。また、相手を自立に導くのが哲学カウンセリングの目的だという観点から、「コンサルタントは最後は自分を余計な者にしなければならない」と述べていたのも、注目された。

つぎにC・K・ムッシュのヘルスケア組織論についての講演。彼は現在ヘルスケア・コンサルタント業に携わっているが、今回の話自体は、ヘルスケアに特有の事例とはいえない。阪大の臨床哲学で交わされているようなケアの本質論を問う姿勢は見られなかった。「合意とは、意見が一致しなくてもかまわないんだということで意見が一致すること (agree to disagree)」というのは、じっさいの場になるとこれですまないのは目に見えていても、表現としては鮮やかだった。また、リーダーの資質を重視して、「リーダーは注意深く耳を傾けなければならないが、組織に対しては「ストレンジャー」である。なぜなら、彼は組織についてのストーリーを語るのが務め

で、そのためにはその組織について突き放した知識を持っていなければならないからだ」と述べたのも、私には印象的だった。

哲学カウンセリングの存在理由

リンドセットのセッションも実り多いものだった。彼は、ガンのため発表断念を余儀なくされた、アメリカのヴォーナ・フィアリーの代打である。司会のコミカルな紹介によると、リンドセットは「我らのテディベア」であると同時に、「世界最北に位置する大学」の教官でもある。つまり、かれはノルウェーのトレムソ大学に勤めているが、ミュンヘンに住み、同地でクリニックを開いている。リンドセットは医療系の学部に所属していて、家族療法で世界的に有名なトム・アンデルソンとは同僚だそうである。アンデルソンの関わった事例を二つあげて、彼が「治療」を追求しておらず、解釈学的手法をとる点で、哲学カウンセリングと一脈通じているとリンドセットは指摘する。ただ、アンデルソンと哲学カウンセリングとの違いは、前者がふつうの対話を交わすことを目指しているのに対し、後者はクライアントの言説に批判的に関わり、「隠れた公共的次元」を明らかにしようとする点にある。哲学カウンセリングが哲学の「適用」であるのは確かだが、固定された確実な適用ではなく、むしろ被り (suffering) が逆に哲学に適用し返されるのである。このようにして哲学は、自己の存在理由を証示してみせなければならない。

講演後の質疑応答で、チャンは、リンドセットが「隠れた意味」を哲学は探し出すといったが、それはいったい「誰の意味」か、哲学者が外から持ち込む意味ではないのかと問うた。ソーシャルワーカーである自分だったら、あまり患者や家族の「意味」

の次元には立ち入らないという。リンドセットは反論して、ヘーゲルの「具体的普遍」の説を引きながら、自分があげた事例で、「意味」はけっして哲学者が持ち込むのではなく、患者自身の話の文脈の中にある。もともと文脈に内在するその次元を明確化するのが哲学者の役割である。哲学カウンセラーは具体的なストーリーから乖離しないことが肝心である。とくに分析系の哲学などは、実在論をめぐる論争を見てもわかるとおり、生の文脈から離れた「無駄なゲーム」(lost game)を演じがちだが。

質疑応答では、哲学カウンセリングと精神療法との違いも論じられた。イスラエルのシュスターが精神療法の臨床家たちは開放的なふりをしているだけだと非難したのに対して、スウェーデンから来た2人の精神療法家が鋭く反論した。そのうちの1人は、精神療法と哲学が違うのはわかるが、リンドセットの「対話」という言葉の使い方は、対話の誤用ではないか。一方(カウンセラー)がただ聴くだけというのは、対話のルールである相互性を犯すものではないか、と尋ねた。この異論に対し、リンドセットは、哲学カウンセリングでも話が実り多くなってくると、両者(カウンセラーとクライアント)が同じレベルに近づき、同じようなことを考えていたことが判明するのだ、と答えた。両者は抽象的な議論のバトルをしているのではなく、具体的な関心事にコミットして対話しているのであるから、カウンセラーが「主観的」な意味づけを一方的に加えているのでは決してない。そのような捉え方は、カウンセリングの現場を知らない、ためにする抽象論だといっているのであった。

ちなみに、哲学カウンセリングと精神療法の相違は、大会最終日のヴァン・ダーゼン(van Deurzen)の講演のテーマでもあった。ヴァン・ダーゼンはイギリス精神

療法界の中心人物の1人であるが、以前は哲学を専攻したこともあって、哲学カウンセリングと精神療法はお互いに必要とされているという意見だった。

講演以外で印象に残ったことをひとつ。フランスのジェラルド・ティシエは故マルク・ソーテと共に哲学カフェを広めた人物であるが、討論の素材としてはむしろ映画を使うのがいい、つまりカフェ・シネマだと熱心に語っていた。もちろん、彼は自分でそれを実践していて、最近、日本映画では役所広司主演の「うなぎ」を使ったという。

哲学プラクティスの国際学会、次回は2年後の2001年にオスロで開催されることが決まった。また、オックスフォードの大会のうちに、インターネットを活用して恒常的に意見交換をする態勢が作られた。ただ、その後の推移を見ていると、私自身を含めて、ネット上の議論を敬遠する人も少なくないようである。

(なかおかなりふみ・教授)

子どものための哲学・ 子どもとともにする哲学

寺田俊郎

事前に郵送されてきた発表要旨のなかに P4C という記号が散見され、一体何のことかと思いながら学会に参加した。学会も半ばになってようやく、Philosophy for Children 「子どものため哲学」の略号だと気づいた。私が「哲学プラクティス国際学会」に参加したいと思ったのはこの「子どもための哲学」に興味を惹かれたからだった。アメリカ合衆国で「子どものための哲学」が実践されていることは昨年ボストンで開催された「世界哲学会議」で聞いて知っていたが、その内容はよくわからないままだったのである。

最終日の分科会で、イギリスの「子どものための哲学」のリーダー的存在である Roger Sutcliffe は、P4C の語呂あわせを用いて「子どものための哲学」の性格を次のように言い表わした。critical, creation, caring, collaboration/ children, citizens, communities, co-existence. そして、サトクリフは、後者の組を指して、「子どものための哲学」とは「多文化的な民主主義」の教育に他ならないと説明する。Martha Nussbaum が、大学での哲学教育をやはり「多文化主義」の観点から論じていることを思い出した。

サトクリフは、「子どものための哲学」に対する一般的な疑念として、(1)「哲学」という語に対する抵抗感、(2)「ための」が伴う「こどものためにやってやる」という感じ、(3)教育内容を増やすだけではないかと

いう懸念、の三つをあげ、これに答えて、Lipman の教科書や Murriss の絵本を用いた授業を紹介しながら、次のように「子どものための哲学」を規定する。「子どもとともに哲学的な探求をすること」。そして、その中心にあるのは「考えること thinking」であり、考えることには次の四つの契機がある。考えることについて考えること、他者とともに考えること、自分で考えること、感情を尊重しつつ考えること。サトクリフは、感情を尊重しつつ考えることを、考えることと感ずることとを区別したうえで両者を結びつけることと言い換え、その重要性を強調した。

このように、イギリスでは「子どものための哲学」が実践されており、教科書もあれば、研究の蓄積も相当あり、協会組織 (SAPERE) もある。アメリカ合衆国で実践している人々の発表も聞くことができた。オランダでは、「哲学ホテル」と称して、インターネットを使って子どもたちが哲学的な対話をするプログラムが開設されている。メキシコで小学校長をしている女性は「子どものための哲学」を導入するための準備として参加していた。今回も、実際の授業を見学したわけではなく、「子どものための哲学」の実践を具体的に理解したとはとてもいえないが、様々な報告に触れて刺激を受けた。以下、日程をおって研究発表を紹介し、最後に私の考えを述べたい。



発表するカリンとジョアンナ

対話のなかでマリスは、学校では子どもが話さな
いで先生の話聴くこと
に終始し、先生を媒介と
するコミュニケーション
のみが行なわれると問題
提起し、相互に「聴くこと
listening」の重要性を強
調した。「聴くことはまさ
に考えることである Lis-
tening IS thinking.」

考えを変えること

第1日(8月27日)4時からの開会式に
続いて、Joanna Haynesと Karin Murriss
がErrors, not Truth?(「真理ではなく誤謬
を?」)と題して発表した。二人とも「子
どものための哲学」あるいは「子どものと
もにする哲学」を実践している。マリスは
「子どものための」という言い方を嫌って
「子どもと共に(with children)」を用い
る。発表は二人のe-mailによる対話を聴
衆の前で再現するという面白い形式であっ
た。(ただし、マリスは電子メールでのやり
とりは本当の対話を妨げることがわかっ
たと言っていた。)

まず、ジャーナリストが哲学の授業に参
加している子どもたちをインタビューして
いるビデオを見、それに続いて、そのビデ
オが提起する問題についてヘインズとマリ
スが対話を再現した。表題の通り、第一の
論点は間違いから学ぶことの価値であり、
「考えを変えることchanging one's mind」
の実践である。子どもは「考えを変えるこ
と」を「達成」とみなし、「考えを変える
こと」に快感を感じるという。

哲学教育と哲学カウンセリングに通底する もの

第2日(8月28日)午前の全体会では
Richard Smithの発表Reflection and
Encouragement: Support for Learning
Organisationsを聞いた。話し慣れた感じ
の発表者のユーモアを交えた話だったが、
どうも肝心のところが掴めなかった。内容
については中岡先生の報告をご覧いただき
たい。

続く分科会では、Maria Tillmanns:
Philosophical Counseling and Teaching:
Dialogue with Afro-American Students
に出席した。ティルマンズは、哲学カウ
ンセリングと哲学教育との共通性を指摘す
ることから始める。カウンセリングは人生
の問題を扱い、教育は様々な学説を学びそ
れの人生の問題に対する関係を扱う。問題
は心理学的なもの、概念的なもの、感情的
なものいずれにも還元できない。人生の苦
しみを和らげようとしてきた様々な試みを
否定するわけではないが、人生は生きるも
のであって解決するものではないことも忘
れてはならない。ティルマンズは自分の理
9

論の支えをMartin Buberのいう他者の他者性を認めることとしての対話に求め、理性が他者同士の違いを橋渡しするという考えを批判し、他者同士の関係が常に非合理的なものを含むことに注意を促す。そして、自分の立場を保ったまま他者に「会うmeet」姿勢として「非決定の力 power of indeterminacy」を強調するのである。続いて、彼女の哲学の授業のビデオを見、質疑に入った。その授業は少数民族に対する公的な補償教育の一貫として行なわれているもので、我々が見たのはアフリカ系アメリカ人の中学生たちの授業であった。15人くらいのクラスで、生徒が口々に意見を口にし、騒然としたなかで、数人のよく発言する生徒の主導で議論は進んでいき、「意見opinionは誤り得るか」という問題に収斂していく。先生の介入は数度にとどまる。

質疑でまず出された質問は、無統制に見える授業進行について、対話のルールを守るよう促さないのかというものだった。参加させること、自分たちで議論をなんとかやっつけていけることを第一に考えて、意識的に介入をしないようにしているという答えだった。生活指導上の問題がある生徒が多く、活発な議論が成り立っているだけでもよいことなのだ、と言い添えられるのを聞いて、実際に授業を運営していくには様々な苦勞があることが察せられた。また、先生には哲学的に面白い話題であっても生徒にはそうだとはいえないのではないのかという質問に、ティルマンズが生徒も議論を楽しんでいたと答えたのに対して、さらに、先生は哲学者のパーспекティブで楽しんでも、子どもたちは、別のパーспекティブで、たとえば人に自分の意見を説き聞かせることを楽しんでいるのではないかという、厳しい意見が出された。私も気になった点である。ティルマンズは、ま

ず自分の意見を展開させること、そして、それを直観的な議論に終わらせないことに意味があるのだと力説していた。しかし、発言しない生徒を無理強いすることはない。黙って議論を聞きながら自分で意見を展開する生徒もいる。議論のみがコミュニケーションの形式ではなく、たとえば日本人の子どもは議論に参加したがるないので、絵を描いたり詩を作ったりという作業から始めることもある。こう補説した。また、批判的思考はヨーロッパ的なものであり、それをアフリカ系の生徒に教えるのは文化的介入ではないか、というトルコ人哲学カウンセラーの質問に対して、まず、アメリカの市民社会で生活していくという前提があること、さらに、個々の文化的伝統に批判的思考を付加することができるはずであって、文化的伝統を捨てるといっているのではないと主張した。

子どもの問いと大人の思考の接点

天井の高い風格のある食堂でみんな揃って昼食をとった後、David Kennedy: *Philosophy for Children and the Reconstruction of Philosophy* に参加した。ケネディは参加者の多くが発表要旨を読んでいることを確認すると、すぐにディスカッションに入った。しかし、ケネディの発表要旨は15ページにわたる長文で、アリストテレスからバフチン、レヴィナスにまで言及する重厚な内容だったので、私は一通り読んだものの不十分な理解しかもっておらず、議論についていくのは至難だった。議論が集中し私にも面白いと思われた論点は、子どもの哲学と大人の哲学との違いである。子どもの認識と思考が大人とは違うことを強調するケネディに対して、子どもと大人が共有し得る哲学的な問を重視するマリスの姿勢が際立った。

Métier of the Clinical Philosophy

続いて、Jean-Luc Thill の Creative Writing and Mind Mapping に参加したが、あまり述べるべきことはない。マインド・マッピングを実習してから質疑に入り、その有効性をめぐって意見は二つに割れた。クリエイティブ・ライティングにはまったく触れず、参加者からは失望の声も聞かれた。

4時半に午後の分科会が終わるとアフタヌーン・ティーがある。カフェテリアで紅茶やコーヒーとクッキーが出る。芝生の中庭に面したテラスで寛いでから5時20分から夕方の部に入る。夕方の部が終わるとバーでビールを一パイント買い、中庭でそれを飲みながらおしゃべりをする。幸いなことに天候に恵まれ、美しい夕暮を楽しむことができた。7時15分から「哲学的正餐 Philosophical Dinner」。Gale Prawda の司会で各テーブルに分かれて「対話とはなにか」について哲学的対話をする。プラウダはフランスの哲学カウンセラーでカフェ・フィロにも参加している人物である。ウエイトレスやウエイターたちは不思議そうな顔をしてゲールの説明が終わるの

を待っている。私はグループの司会だったので少々無理をして対話を進める努力をしたのだが、プレ・カンファランス以来の仲間の一人の誕生日だったので、ワインが振る舞われ、みんなおしゃべりに夢中で、まよめの発表をしなければならない私は途方に暮れた。

コンテンツ・フリーな授業

第3日(7月29日)の午前の全体会 Eulalia Bosch: A Philosophical Approach to Contemporary Art: Looking out Loud

は欠席し(後でとてもよかった、来なくて損したぞと皆に言われた。)その後の分科会 Richard Morehouse: Philosophical Enquiry in a Univ Psychology Classroom に出席した。ウォードム・カレッジから歩いて10分のケブル・カレッジに初めて赴く。モアハウスは大学の心理学の教授だが、たまたまかかわることになった「子どものための哲学」が面白くなってきたことと、大学で自分の授業をとる学生が心理学的な問いよりも、哲学的な問いに強い興味を示すことに気づいたことから、授業に哲学的なアプローチを取り入れている。たとえば、人格(person)を知ることができるのか、行為に責任はあるのか、人生に意味はあるのか、などである。すでに答えが用意されている既存の理論の「死んだ言葉」よりもこうした問いにこそ学生は興味をもつ。モアハウスは、聴くことと同様に語ることが重要だと強調した。学生と語り聴きあうことによって、教員も自分が知っているとは思わなかったことを知ることになる。

質疑では、まず、モアハウスが「内容にこだわらない(content-free 内容のない)」授業といったのに対し、「内容が予想できない(content-unpredictable)」から「内

容が豊かな(content-rich)」という発想にするべきだという好意的な意見を述べたうえで、それでもそのような授業はアカデミックではないと思われる恐れはないかという質問、さらに、最近の生徒は我々の世代とは違い、テキストが読めないし、聖書、ギリシャ哲学、シェイクスピアなど共通の地盤すらもっていないが、それで困らないかという質問が出された。質問の意図が「だから大学ではテキストの解釈や共通教養の教育に力を入れるべきだ」というものなのか「だから大学で哲学的アプローチを採用することは困難だ」というものなのかは、よくわからなかった。これに対して、モアハウスは、大学にいけば「頭がよく(intelligent)なる」という幻想を捨てるべきだと言い切った。答えばかりを求める教育、答えがあるという幻想はもう捨てなければならない。8・9才の子どもは問いが立てられるのに18・9才になると問いを立てることを恐れるようになるのは、教育の失敗以外の何ものでもなかろう、と。また、ベルギーの高校の哲学教員が、プラトンはこういったカントはこういったという授業になりがちなのだが、大変参考になったと感想を述べていた。

午後のLydia Amir: Don't Interpret My Dialogue! では対話のモノローグ的構造について非常に面白く活発な議論がなされた。また、Veening: Debating Ethical Issues among Professionals は、「べし」を含む命題を記号化して現実の道徳的判断に役立てようという趣旨で、内容そのものは倫理学を学んだ者にとっては目新しくはないが、それを実際に使おうという意図は斬新だった。ビジネス界の人々が盛んに質問をしながら実習していたのが非常に印象的だった。

夜は、美しく暮れていくガーデンで演じられる「マクベス」を観た。

ハリーの発見——逆は真ならず

最終日(8月30日)午前の分科会は、最初に紹介したサトクリフの発表と、Susan Wright: Philosophical Counseling at University School of Education に出席した。

サトクリフの分科会では、先に述べたような講義に続いて、二、三の質疑があり、リップマンの教科書の一節を使って実習をすることになった。小学生のハリー・タートルマイヤー(アリストテレス!)を主人公とする次のようなお話である。ハリーは理科の時間に「あらゆる惑星は地球の周りを回っている」ということから「彗星は惑星だ」と発言して恥をかく。ハリーはどうして間違ったのか考えているうちに、「あらゆる文は逆にすると間違いになる」ことを思いつく。そして、自分のすばらしい発見を興奮して友だちに話す、友だちは「それがどうしたの」という顔をする。この一節を参加者みんなで読んで話し合い、続いて参加者の何人かがサトクリフの生徒になって授業を実演し残りの参加者がそれを観るという形で実習は進められた。私は、このテキストには「答え」が与えてあるので面白くないと不満を感じたが、それは私の早合点で、後で読み直してみるとハリーの発見は不十分であり、みんなで考えてみる余地が残されているのである。(「逆にすると間違いになる文もある」が正しい。)実際の授業ではどのようなやりとりがなされるのだろうか。

ライトは、教育系大学の教員が哲学カウンセリングをすることの重要性と問題点を論じた。しかし、大学に限らずどんな教員でも経験する、生徒や学生の個人的な相談に乗ることの重要性と問題点を一般的に論じた感じで、議論もあまり深まらず残念であった。

Métier of the Clinical Philosophy

午後の全体会、学会最後のプログラムは Emmy Van Deurzen: Speech is Silver, Silence is Golden: Philosophical Consultancy or Psychotherapy である。内容の濃い発表だと思ったが、詳しい内容については中岡先生の報告に譲りたい。

「子どものための哲学」から学び得ること

「子どものための哲学」の様々な実践に共通しているのは、「子どもと大人が共に自ら考える」ことである。大人が子どもに哲学を教えるのではない。それが広く実践され反省が積み重ねられていることに刺激を感じずにはいられない。

しかし、「子どもと大人が共に自ら考える」ことを「哲学」に限る必要はないだろう。「他の人と共に自ら考えること」は、日本の小学校の従来のカリキュラムも目指してきたことであり、少なくとも理念としては常に掲げられていたことである。にもかかわらず、それがほとんど実現されていないのはなぜか。その一つに「考える」という営みに対する根本的な誤解があるのではないか。それを反省するヒントを「子どものための哲学」の実践と反省の蓄積は与えてくれると私は考える。哲学の伝統をもたない日本において、「子どものための哲学」を直輸入することは難しいだろうし、またそうすることにそれほど意味があるとも思えない。「子どものための哲学」という独立した科目・時間を設けるというよりもむしろ、様々な教科や活動を通じて「他の人と共に自ら考えること」を学ぶ環境を整えていく際に、「子どものための哲学」を生かすべきではないだろうか。「子どものための哲学」の専門家として教室に入らなくても、その他の学科のカリキュラム作成や教員養成のプログラム作成に参画することができる。

また、「他の人と共に自ら考えること」を真剣に考えれば、教室の構造や、教室内のコミュニケーションのあり方などを考え直さなければならなくなる。マリスが指摘しているように、教員中心のコミュニケーションの支配する教室では、哲学することはできないのである。このように、「子どものための哲学」は教室や学校のあり方そのものを考え直すことを促す。

さらに、「子どものための哲学」は、中等教育において、いやモアハウスも報告しているように高等教育においてすら、どのように哲学の教育がなされるのがよいのかを考える上で有力なヒントになる。学説史の知識を得ることにはそれなりの意味があるだろう。しかし、それが「他の人と共に自ら考えること」と結びつくものでないとなれば、それはもはや哲学ではない。引かれ古された言葉だが、「人は哲学を学ぶことはできない、ただ哲学することを学ぶことができる」のである。そして、既に明らかだと思うが、「子どものための哲学」は、臨床哲学の研究・教育のあり方を考えるうえでも参考になるだろう。

(てらだとしろう・博士後期課程)



ロンドン・タワーの寺田さん

「ともに考える」ための道具

"Socratic Dialogue"の経験から

堀江剛

今年7月、哲学プラクティス国際学会に出席した。哲学を大学でのアカデミックな営みに限定せず、社会に向けて「開業 Practice」することによって広く私たちの生活場面に役立てようとする動きが「哲学プラクティス」である。そこでは、いわゆる「哲学カウンセリング」や「哲学コンサルティング」が行われている一方で、「集団による思考・判断」の作業を方法的に整備し、それを社会の中で活用することも試みられている。その方法の柱になっているのが "Socratic Dialogue" (以下SDと略記する) と呼ばれるものである。今回の学会では、本大会の前にこのSDのワークショップが行われ、臨床哲学のメンバー三人(本間、寺田、堀江)が参加した。

"Socratic Dialogue"とは?

SDは哲学者 L. Nelson (1882-1927) によって考案され、その後ドイツ、イギリス、オランダのグループが、これを集団での合意形成・意思決定のための一つの形式として発展させたものである。現在SDは、社会や組織の中で通用している思考習慣や価値判断などを、それらの個人間の違いや調整の仕方を含めて議論し反省するための方法として、学校、病院、企業などで活用さ

れている。また、特定の理論に頼らず哲学する(反省的にものごとを思考する)ことの良質な環境を提供するものとして、哲学の学生や哲学に関心を持ちそれを社会の現場に生かそうとする人々のために役立てられている。

具体的にSDを始めるに当たって、まず議論のためのテーマが一つ与えられている。テーマは参加者に関心のある適切なものが主催者によって決められている場合もあれば、前もって参加者と相談の上で決める時もある。一つのグループの人数は6~10人、そこにSDの進行役 facilitator が加わる。時間は一日から一週間まで様々だが、決められた時間内に議論を終えることが要求される。

SDが定める議論の手順は次のようなものである。まずテーマに即して、参加者一人一人が自分の具体的な経験に基づいた「事例 example」を出す。同時に、その事例に関連して自分が何を明らかにしたいのかを考え、それを一般的な「問い question」のかたちにする。次に、出された事例の中から、グループが議論の材料として共有すべきものを一つ選ぶ。選ばれた事例は、それを出した人によって詳細に報告される。他方、出された問いを参考にしながら、選ばれた事例と関連してグループ

として明らかにしたい問いを一つに絞る。そしてこの問いに対して、参加者が答えを出し合い吟味し、グループとしての「答え」を仕上げる。

参加者は、本などによって得た理論や知識を用いず、自分の経験から明瞭・簡潔に発言するよう求められる。出された一つ一つの事例・問いは、グループでの合意事項として、また着実に議論を進めていくための目印として、簡潔な文章のかたちで(選ばれた事例はさらに詳しく)板上に書き出される。さらに、グループが議論に行き詰まった場合には、参加者や進行役の提案によって、議論の進行の仕方に関して議論する「メタ・ダイアログ」が行われる。

ワークショップで行われたこと

ワークショップで与えられたテーマは「理解と誤解」、二つのグループ(進行役を除いてそれぞれ8人と9人)が三日間(約18時間)かけて議論を行った。私の参加したグループには、すでに十数年オランダやイギリスでSDを指導している哲学者の進行役とともに、様々な国(オランダ、ベルギー、ドイツ、カナダ、オーストラリア、日本)から多彩な職業(生命倫理が専門の哲学者、企業コンサルタント、教育関係の

企業経営者、学校教師、「ダイアログ・コンサルタント」、臨床哲学の大学院生)の人々が集まった。いずれも、人との対話や集団でのコミュニケーションに関わり、それを仕事にしている人たちである。

参加者から出された「事例」は様々であった。人に道を尋ねその言葉は理解できたのに、実際にはその道筋が予想外に複雑で、目的の場所に辿りつけなかった経験。病気で死にゆく友人に励ましの言葉を投げたが、それが理解されたかどうか分からなかった経験。自分の言ったジョークが相手に理解されなかった経験。その他、生徒と教師との間の理解と誤解、仕事上での伝達ミスなどが事例として出た。そしてその中から「人に道を尋ね・・・」の経験が、シンプルかたちで議論できるという理由で選ばれ、参加者の質疑とともにその事例の詳細が模造紙4-5枚にわたって書き出された。

これと並行して様々な「問い」が提示された。「理解とは何を意味するのか」「どのような状況のもとで理解は損なわれるのか」「理解はどれほど経験に依存するのか」「理解は何に基礎を置いているのか」「ものの「言い方」は理解にどのような効果をもたらすのか」などなど、合計で約20もの問いが立てられた。そこからグループとして選ばれた問いは、次のようなものである。「様々な種類の理解があり、また情報・知識に程度の差があることを考慮した上で、理解とは何を意味するのか」。

こうした作業に二日を費やし、最後の一日でグループとしての「答え」を仕上げるものが残された。そのためにまず、選ばれた事例のポイント(それは、道を教えられた時の「言葉(情報)の理解」と、そこから目的場所まで行けると思った時の「理解したと思ったこと(誤解?)」との落差であった)をグループで確認し、それを手がかりにして個々の参加者から様々な「答

え」の試みがなされた。その数は13にのぼった。こうした試みを調整し、最終的にグループが合意に達した「答え」は次のようなものである。

1 理解とは、情報とともに一定の状況に対処するための何らかの手段を得ていることを意味する。

2 理解とは、問題になっている事柄(それが知ること・見ること・為すことのいずれであれ)を満足させる限りで、何かを捉えていることを意味する。

3 理解とは、情報を得ること以上の何かを意味する。そしてその「以上の何か」は時に不明瞭であり、誤解を生む可能性を持つ。

4 以上の三点は、しかし理解することの意味の全ての範囲をカバーしない。なぜなら理解は(後になって何かが分かったり分からなくなったりするように)不連続な変化を伴ったダイナミックな過程でもあるからである。

このような「答え」が一般的に満足のいくものかどうかは別にしても、私たちはグループとして一つの事例に基づきそれを考え抜いて、曲がりなりにも一つの成果を得た。この成果を得るために、グループは様々な寄り道をし、混乱し、再び気を取り直して議論を続けるというプロセスを踏んだのである。

議論するプロセスの大切さ

SDでは、内容に関して深く思考すること以上に、議論そのもののプロセスを体験することにこそ、大きな意味がある。言い換えれば、より優れた結果をSDで出すことが問題なのではなく、むしろそのプロセスが問題なのである。参加者には、与えられたテーマに対して自分の考えをまとめ、表明すること以上に、他の参加者の経験や

考えを十分理解すること、そしてグループでの合意のためにそれらの異なった考えを調整していく努力が、議論の個々の局面において求められる。これは非常に骨の折れる作業であるが、SDはその作業を参加者に遂行させる方法なのである。

そしてそれはSDの設ける手順やルールによって可能になっている。すでに述べた、人数・時間の制限、板上への書き出し、理論ではなく自分の経験から発言すること、「事例」や「問い」の共有、「メタ・ダイアログ」などがそれである。また参加者は、議論の中で生じた疑問点を必ず表明するよう求められ、原則としてそれに関して全員が納得の行くまで議論を続行しなければならない。こうした一連のルールによって、議論は抽象的になったり大きな飛躍を含むことなく、極めてゆっくり着実に進行する。

一見すると、SDの要求する様々なルールは議論を型にはめ込み、自由な討論を制約するかのように見える。私たちも実際にSDに参加するまでは、そんな感想を持っていた。しかし事態は全く異なっていた。通常の討論では、それが「自由」である故に、討論の本来の営みを攪乱してしまうことがよくある。例えば、知識の豊富さや権威などによって相手の意見を押しさえつけ



ロンドン・タワーの堀江さん

る、話題を突然変える、様々な観点が提出されて議論の焦点が定まらなくなる、具体的な経験に依拠しないことから話が抽象的になる等々。また人数が多すぎて参加者の発言する機会が偏ってしまう。しかしSDでは、こうした要因(それは必ずしも議論にとってマイナスになるばかりではないのだが)の多くが、ルールを通して回避される。

もちろん、こうしたルールによってすばらしい討論が常に展開されるわけではない。SDはある意味で、ルールによって制御された極めて人工的な議論の空間であると言えるし、それ故の限界もある。しかし少なくともそこで参加者は、与えられたテーマについて他の人とじっくり考えると同時に、本来の議論することの難しさとそのプロセスの大切さを学ぶことができると言える。

議論の土台を共有する作業

SDを実際に経験し、その個々のプロセスやルールの意味を細かく見ていけば、議論することに関する数多くの示唆が得られるであろう。今、その中で一つ特に興味深いと思われた点を書き留めておきたい。

たいていの討議では、その材料となる事例や資料は前もって与えられている。あるいは参加者によって、その人の経験や知識として(予定されたかたちで、もしくは突然)議論の中に持ち込まれる。この時、材料がみんなに十分理解され、議論に妥当するものとして承認されているかどうかは、差し当たって問われない(もちろん議論の中でこれが問題になることはありうる)。同様に、議論の中で何が明らかにされるべきかは、あらかじめ前提にされている場合もあれば、参加者が個人的に持っている課題や問題意識として、議論の中で他の参加

者に投げかける場合もある。しかしそうした「問い」が、いちいち全員で吟味されることはまずない。議論における材料や問いは、ほとんどの場合議論の外から参加者に与えられるか、それとも参加者個人の問題に(つまり、これもまた議論の外に)委ねられるか、いずれかなのである。

ところがSDでは、こうした材料・問いをまず参加者全員が出し合い、議論の上でその中の一つを選び取ることから始める。つまり議論の土台となる材料・問い自身を議論によって吟味し、参加者の間で共有する作業から始める。これによって少なくとも、経験や問題意識を異にする人々がそれぞれの立場から恣意的に議論を始めるといった混乱が抑制される。また参加者は、議論の土台そのものを議論の外から強制的にあるいは偶然に「与えられた」ものとしてではなく、自分たちが議論によって「選んだ」ものとして引き受けることになる。SDは全体の半分あまりの時間を費やして、この議論の土台の共有という調整作業を丁寧に行うのである。

またこの作業は、参加者の議論に対する関わり方において、議論が「別様にもなりえた」という自覚を促す。選ばれた事例がもし別のものであったなら、議論は全く異なったものになっていたであろう。また、様々な異なる観点から別の仕方で「問う」ことが可能であったにもかかわらず、その中の一つをグループはグループとして選んだのである。そして議論の結果見つけ出された「答え」もまた、その限定された可能性の中から生み出されたものであり、それをグループとして引き受けなければならないことが意識される。

議論の土台を共有するという作業を通じて、参加者は、自分たち自身が責任を持って議論を進め、その結果を認めなければならないことを自覚する。またこの作業に

よって、参加者は自分たちの進めている議論に対して一定の距離を取り、議論の在り方を冷静に評価できるようにもなる。こうした意味でSDは、集団での討論というものが複数の個人による単なる合意や妥協以上の共同作業であること、それが様々な可能性を取捨選択しながら進行する一個の共同的思考プロセスであることを、その限界も含めて教えてくれるように思われる。

「ともに考える」ということ

三日間のワークショップが終わって、二つのグループが合同で語り合った。そこではSDの意義をめぐって肯定・否定含めて様々な意見が出された。その中で一人の参加者が、SDの意義を何も難しく考える必要はない、それは「ともに考えること thinking together」だ、と言ったのが印象に残っている。

単純な言葉ではあるが、それはSDの本質を言い当てていると思った。そして同時に、SDを体験した者として、そこには複雑な意味合いが含まれているように思えた。すなわちこうである。SDは「ともに考える」という、言葉にしてみれば単純な営みでしかない。だがその営みがどれほど困難で骨の折れる作業であり、それを実現するためにどれほどの方法的な工夫を要することか。こうした作業や方法的工夫を通じて初めて、私たちはより濃密なかたちで「ともに考える」ことができるのである。

SDは、どのようなメンバーとでも、どのようなテーマでも行うことができる。また、民主的な討議を実現するための一定のルールを持っている。しかしそれは、例えば討議倫理の思想のように、民主的な合意形成をめざす倫理的な理念を示すものではない。もちろんこうした理念と重なる部分はあるにしても、SDの本領はむしろ、実

際にそれを様々な領域の人々とともに実行することのうちにある。そこで体験される共同的思考プロセスのうちにある。言い換えればSDは、領域の異なった人々、あるいは同じ領域の人々が「ともに考える」ための実践的な「道具」として本来の機能を発揮すると言える。だからこそ「哲学プラクティス」の有効な力になりえている。

また、領域の異なる者が集まって議論し、現場に深く関わる人々と「ともに考える」ことを課題とする臨床哲学にとって、SDは有効な道具の一つになると思われる。すでに10月、私たちは「他者理解」というテーマで短いSD(一日)を実験的に行った。参加者の反応は概ね良好であったが、進行役の能力を含め、さらに経験と工夫が必要であることも実感した。私たちは、今後も臨床哲学にSDを活用する道を模索していくであろう。

(ほりえつよし・博士後期課程)

思考の現場

哲学プラクティスと臨床哲学

本間直樹

私たちには、少なくとも哲学が何でないかはわかる——哲学は、観照でも、反省でも、コミュニケーションでもないということだ。
(ドゥルーズ=ガタリ『哲学とは何か』)

プレ・カンファレンス・ワークショップに参加して

私は、本大会前に開催されたまる3日間におよぶ“Socratic Dialogue”(「ソクラテス的対話」——以下SDと省略する)のワークショップに参加した。SDについては、事前に最小限度の予備知識だけを携えて参加したのだが(SDの具体的説明は、堀江さんの文章を参照。)私がSDに参加して現実と感じた面白は——その名前の由来はともかくとして——差し当たり「ソクラテス」にも「対話」にも関わりが無い。なにしろSDは厳密には「対話」ではなかったのだから。

SDは最低6人以上のメンバーによって営まれる。このように6人以上の人間が一堂に会して議論する場合、二人で「対話する」こと以上の様々な条件が、その場のコミュニケーションに課されるはずである。例えば、一人あたりの発話時間の制限、話すということが一対多という形式でなされること、意見の相違が具体的な人数比として現れやすく、少数/多数という区別が生まれてしまうこと、などなど。

要するに、SDの具体的な場で起こっていることは「対話」以上のことであり、しかも、「対話」という理念を掲げてSDを

語ることはその面白さ(と私が感じているところ)を覆い隠してしまうとも言えるのだ。

SDの特徴を「対話」という言葉を用いずに表現するならば、まずそれは、《複数の思考をコミュニケーションを通じて組織すること》、あるいは《複数の思考の組織化するコミュニケーション》とすることができるとはのではないだろうか。

例えば「私が考える(コギトー)」は個人の頭の中で浮かんで消える様々な思考を所謂「内的時間意識」のなかで組織化することだと言える。しかし複数の個人が集まって、一つの時間の流れのなかで複数の思考をコミュニケーションによって組織することは、前者とは比較にならないほど非常に複雑な処理(作業)を必要とする。今、個人の頭のなかの思考ではなく、(言葉、身振り、無言を含む包括的な意味での)現実のコミュニケーションによってある時間のなかで成立する《関係》を「社会システム」と呼ぶことにしよう。そうすれば、SDは「社会システムとしての思考作業はいかにして可能か」という重要な問いに一つの解答を用意しているように私には思われる。

進化（論）的プロセス

S Dでは複数の思考が持続的にコミュニケーションを構成してゆけるための様々な工夫がなされている。S Dの手順として、参加者全員が一人ずつ具体的経験を話し、その経験に関して問いを立てる。全員が関心をもって参与できる問いを選び、選ばれた例について、再び全員で問いをあげていく。そしてそれらの問いから、全員が共通の関心によって考えることのできる問いを選択し、その問いに一人一人が答えていく、。こうした記述からも明らかなように、S Dは、《ヴァリエーション（変異）》と《セレクション（選択＝淘汰）》の作業の連続、そして議論の存続という《安定化》によって成り立っている。私がS Dをわざわざ「社会システム」という言葉で言い表そうする理由はここにあり、S Dは上記の《変異》《選択》、そしてシステム存続という意味での《安定化》という「進化（論）的プロセス」を土台にして営まれている。そしてS Dの「哲学的」な面白さを一つあげるならば、それは、「哲学的対話／対話の哲学」や「哲学的討議」と言われる従来の議論が、「対話」や「討議」についての規則、倫理など「形式」に関する考察であったのに対し、S Dは、哲学の問いを問うというプロセスそのものに、（参加者の人数、意見）複数性、（話題・具体例の）多様性を取り込むと同時に、「進化（論）的プロセス」を導入することによって、複数性・多様性によって崩壊することのない、具体的で実現可能な（コミュニケーションの）システムを形成することに成功している。S Dに参加している個々人がしていることは、まさに思考することに他ならないわけであるが、S Dを通じて成立するものは、そのような個人の思考の出来事を超えたコミュニケーションによる思考の組織化なのだ

である。S Dが哲学の専門家だけでなく、企業コンサルタントなどの実践の分野に広く受け入れられているのも、こうした理由にあるのではないだろう。

さてここで、臨床哲学がS Dから学ぶべきことを一つあげておこう。それは、単独の思考作業ではなく、《共同作業》としての臨床哲学に大きく関わる。臨床哲学は対話や議論を重視する。しかしそうした対話や議論が単なるモノローグと異なるのは、それが時間・空間・構成員など様々な社会的要素によって制約されており、そのような社会的制約のなかではじめて可能になる《コミュニケーション》、あるいは《社会システム》としての側面をもち、それを無視できないからである。S Dが教えてくれるのは、コミュニケーションを営む上での「マネージメント」の重要性であり、しかもマネージメントが、単なる管理や技術ではなく、複数で思考することを可能にしそれを維持することにとって不可欠であるということなのである。つまりS Dは臨床哲学が《社会システム》としていかにして可能なのかについての示唆を与えてくれている。（注：「ファシリテータ」と臨床哲学の関係を論ずるのは別の機会に譲る。）



ワークショップ最後の集まり
（貼ってあるのは書き出されたストーリーや問いたち）

経験から語ること

しかし他方で、SDの面白さは上記の形式面の記述では論じ尽くされない。SDのより本質的な部分は、参加者の具体的な経験から思考や問いを始めるという点である。SDを紹介する文書に、SDに参加する者にとって要求されるのはある種の「聴く技術」であるとある。SDの中核をなすのは、一定のプロセスを経て選ばれた者が自分の経験からストーリーを紡ぎだし、聴く者の質問に答えながらそれを記述していく（皆の前で紙に書き出していく！）プロセスである。

日本に帰ってから自分たちで主催したSDの場で、私は実際にストーリーを語ることを経験したのだが、人前で体験を再記述するということは、単なる体験の「再生（リプレイ）」ではなく、まさに「再び生き直す」という意味合いを帯びてくるのがよくわかった。体験が進行する時点では気づかなかった様々なことが、徐々に語ることを通じて浮かび上がるのだが、まさにそこに「聴き手」の関心と援助が不可欠なのである。SDに限らず、哲学プラクティスにおいては、「経験から考えること」、「経験から学ぶこと」が強調される。それは狭い意味での経験主義ではなく、既になされた経験に事後的な仕方で経験を再発見し、経験を再創造することに思考が関わるということである。それは、経験についてのモノローグではなく、「語る-聴く」ということを通じての共同作業なのであり、単なるお喋りではなく、まさに思考の場所、思考する現場が生じることなのである。

心理療法やカウンセリングの業界で今「ナラティブ・セラピー」が注目を集めている。方法として「ナラティブ（語り）」を重視することに関しては、SDや「哲学カウンセリング（コンサルタント）」（以下P

Cと省略）と共通点がある。「ナラティブ・セラピー」は、システム論的な観点からセラピーを再構築する家族療法の新しい潮流である。

家族療法では「リフレイミング」という技法があり、ある人が一つの思考や行為に固執してそれを繰り返し（例えば自殺を試みるために何度も高いところに登ってしまうなど）、別様に行動・思考することができないときに、同じ思考・行為が別の枠組みから見直されることで（実はその人はもともと高所恐怖症であったのに、それが「乗り越えられていた」ことに気づくなど）、本人が自分の行う思考・行為の「ばからしさ」に気づき、別の思考・行為の可能性に目を向けるというものである。この「リフレイミング」に関してはイギリスの国際学会でもワークショップが設けられ、「リフレイミング」が「ユーモア」の役割と密接に関係することから、PCにおける「ユーモア」の意味など、有意義な議論がなされた。

イギリスでは話題にはならなかったが、PCにおける「ナラティブ」の役割は、ナラティブ・セラピーにおける「リストーリーイング（語り直し）」と類比的である。「リフレイミング」と「リストーリーイング」は密接な関係にある。前者が行為者にとって支配的であった枠組みを別のもの変えることを手助けするのに対し、後者は行為者の現実理解を支配している物語（ドミナント・ストーリー）を、聴く作業を通じて別の物語（オルタナティブ・ストーリー）へと語り直していくことを援助する。前者がよりテクニカルで操作的介入に見えるのに対し、後者は主に「聴く」という受動的姿勢を重視する。もっともナラティブ・セラピーは単に受動的であるわけではない。「聴く」という作業を通じて、語り手の話の不整合を明らかにし、場合によってはそ

れを指摘したり、質問を差し挟む。この点は、SDにおけるストーリーの記述とよく似ている。語り手の最初の記述は、しばしば矛盾や不明確な点を多く含んでいる。聴き手の「肯定的な関心」のもとでの質問によって、最初の記述では不明確であった点が、徐々にではあるが見えてくることがある。語る事が単なる経験の反復ではなく、生き直すことであり、しかも他者との共同作業であるということが両者の共通点である。

セラピーと哲学

しかしそれにしてもセラピーと哲学との違いは何であるのか？ PCに関する議論でも、心理療法とPCがどう違うのかがしばしば焦点になる。詳しく述べる余裕がないので、先に述べた「リフレイミング」と「リストーリーイング」に関して簡単に私見を述べておこう。「リフレイミング」の「フレーム」が、人が現実を何らかの観念や概念（例えば「誠実／不誠実」など）によって捉えていることを意味すると解釈するならば、PCはまさに概念を通じてある人の現実に関わるといえよう。人は自分の経験を記述するとき意識・無意識に何らかの観念・概念を導入する。PCにおいて、本人がある概念に依拠していることに気づいたり、自分の概念使用の一貫性や不整合を気づいたりすることによって、新たな別の概念枠組みから経験を見直すことができる。それはPCにおける「リフレイミング」の実践例であることになろう。おそらくPCが関わる概念とはテキストのなかのそれではなく、ある人の具体的な経験を可能にしつつ規制する枠組みとしての概念であろう。例えばある人が自分の行為全般を「ケア」という概念によって括ろうとしているのなら、それは「フレイミング」の

問題であり、哲学は《概念》——あるいはもっと一般的に《言葉》を媒介にしてフレイミングとリフレイミングを助けることによって、現実に触れようとする試みであるということができよう。

「ナラティブ」に関しては、PCは単なる「記述者」「書記」以上の役割を果たすはずである。PCは所謂「クライアント」の言葉に肯定的な関心をもち、「語ること」に積極的なコミットメントを行う点は心理カウンセリングやセラピーと共通するだろう。しかしナラティブ・セラピーと異なるのは、SDやPCにおいては、相手の話をじっくり聴くことを通じて、相手の主張の妥当性・正当性や論理的整合性を吟味したり、隠れた前提を露わにしたりすることが重視される点である。PCの目的は、通常の議論にありがちなようにレトリックやロジックによって相手を圧倒し、黙らせることではなく、またセラピーとして「クライアント」の現実構成（理解）に何らかの変革をもたらそうとすることでもなく（勿論、レトリックとロジックは相手を納得させる技術である限り必要であろうが）、双方が納得するまで問いを問い、議論を続けることだ。

哲学プラクティスは理・言葉という意味でのロゴスの力を他者とのコミュニケーションのなかで「検証」していく試みである。しかしロゴスは実践の場で要請され、効果的に働くと同時に、暴力にもなり得る。コミュニケーションにおいては「聴くこと」は純粹に受動的な行為ではなく、相手に何かを「語らせる」というロゴスのもう一つの力であることを忘れてはならない。

「概念の創造」としての哲学？

最後に、哲学プラクティス（そしてプラ

クティスといわれるもの一般)から臨床哲学はなにを学ぶことができるのかを足早に書き留めておこう。

臨床哲学にとって「現場」とは何なのか、ということがしばしば議論される。SDやPCを通じて思うことは、臨床哲学にとっての現場は、まず差し当たり、「思考の現場」であるということができないのではないか？——しかしこの思考は(先もSDに関して述べたように)単独者の思考ではない。他者が思考する場所、しかも明確な思考に結実する以前の、疑問や問いが浮かび上がるその場所に居合わせ、問いを立て、その問いについて思考することに立ち会い、場合によってはその問いをともに問うこと。(注記:「ともに問うこと」、私が他者の問いを問い、私の問いを介して他者が自らの問いを問うことは、循環プロセスであり、それはもはや個の問いを越えた——「共同体」ではなく——「社会システム」の形成である。)

他者の問いに関わること——それは、問題“それ自体”を考えることでもなく、また他者の“ために/代わりに”(pour l'autre)問うことでもない。強調したいのは、問いをともに問うことであって、問いに対する答えを、既存の知識から探し出してきて、相手に与えることではない。むしろ、相手が見いだしたと思う答えに疑問を差し挟む必要すら生じるかもしれない。また相手に先回りして問を定式化し、相手に考える隙を与えないままその答えを探すことは、相手から言葉・思考を奪ってしまうことになる。必要とされるのは、他者の「ナラティブ」から思考と問いを聴き取ることのできる感受性であり、「リフレイミング」や「リストーリーイング」などの臨床の技法はそのような感受性に関わっているはずである。そこで臨床哲学は、臨床の技術と手を結ぶことをいとわず、その技術を用いる

なかでその意味そのものを考える必要があるだろう。

もう一つ、臨床哲学においては、それが哲学であることの固有性が常に問われる。それについて、臨床哲学は、哲学の「ロゴス(中心)主義」という問題を(テキストの読解ではなく)コミュニケーションについてではなく、まさにコミュニケーションのなかで考えることによって引き受けるのだと答えることができるかもしれない。冒頭に引用したように、ドゥルーズ=ガタリは——ハーバマスを揶揄するように——哲学はコミュニケーションではない、と言う。確かに臨床哲学は、コミュニケーション一般ではないし、コミュニケーションについての理論を構築するわけでもない。ドゥルーズ=ガタリによれば、「哲学者は概念の友」であり、「哲学は概念を創造することを本領とする学問分野である」。ならば彼らが、複数の思考でありながら、二人ではなく「ドゥルーズ=ガタリ」としてテキストを書いたように、臨床哲学は、概念の制作と創造をコミュニケーションのなかで試みるのだ、と言っておこう。

(ほんまなおき・助手)

二つの国際学会のホスピタリティについて

仁平雅子

私はドイツ・イギリスと二回の学会に参加しました。実りある学会運営のために、それぞれの開催事務局がしつらえた道具立てに着目してみようと思います。

* 遠方からの参加者のための宿泊の手配
...でき得る限り会場敷地内で、華美であるよりはシンプルで清潔に、できるだけ低料金で。まったく無記名な雰囲気より、過去にどんな人がここにきたらうと思いを馳せられるような、もろもろの小さな痕跡や木々の眺めがあるほうが好ましい。希望すれば3食付き。部屋の鍵は自分で管理できること。部屋から国際電話ができるとうとううれしい。

* 参加者の言葉のハンディを最小限に押さえる
...これは一見参加者一人一人の努力に負うところが大きいようにも思えるが、主催者側の姿勢は基本的なトーンとして重要。あらかじめハンドアウトを用意する。部屋のサイズ。通訳やマイクの手配。コピー機の準備。等々、案外ハード面の状況が左右する。

* ヨーロッパの夏の日照時間を無駄にしない
...なんで夜9時近くまで当然のようにプログラムでぴちぴちなのかは、好意的に考えればこういうことでしょう。みんな時間とお金を使って参加するんだから、損した感じはみじめな気分につながるのかな。適度なお得感はプログラム内容とも緊密に関連する。

* 集えるスペース

...しかしそうなってくると、バーとか、大きな木の下とか、眺めのいいテラスとか、

はっきりと雰囲気異なる空気のあるところが生理的に必要になってくる。

* ティータイムを忘れない

...さらに、お茶のできる時間と場所はタイムスケジュールの中に明記し、飲み物・お菓子はそれぞれ三種類ほどのチョイス(胚芽クッキーかチョコチップクッキーかバタークラッカーか、といったマイナーなチョイスでもOK)が可能にようにする。お茶に呼ばれなかったと思わせるようでは困ります。そして、サービスには特に厳選された人物を選ぶこと。

* 学会長はとにかく「姿を見せる」

...プログラムの内外に関わらず、ほとんどの人が集まるような機会には主要なメンバーは姿を見せる。特に学会長の存在は、学会の「表舞台」として参加者に共通の記憶を作る。

近い将来、日本で国際的な哲学の学会が開催されることがあるとして、私たちならどのような形で遠来の客を迎えることになるのでしょうか。テーマは『ホスピタリティ』かもしれませんね。

(にへいまさこ 博士前期課程)

ソクラティック・ダイアローグ in Osaka

ソクラティック・ダイアローグの面白さは、ルールや結論だけを報告するだけでは分かってもらえない... そういうもどかしさから、イギリスから帰って2ヶ月後、手探り状態ではあるけれども、イギリスで学んだ最低限の知識や経験から、私たち臨床哲学の有志メンバーで大阪大学にて(おそらく日本で初めての)ソクラティック・ダイアローグのワークショップを企画した。以下はその参加者からのメッセージである。

馬嶋 裕さんより

先日、本間・堀江両氏の呼びかけによって催されたソクラティック・ダイアローグ(以下、SD)に参加した感想を少々述べる。イギリスでのワークショップに参加した両氏は、この実践について少なからぬ興奮を持って語っていたものであるが、私たちも、と不慣れながら短縮版を実際やってみただけでもその片鱗はうかがえたように思えた。日常生活ではあまりない頭の使い方をすることになり、それに伴う独特の心地よさがあるのだ。もちろんこうしたことは偶発的に訪れうるものだし、私に限って言えば小中高時代の「討論会」などでもテーマによってはこうした興奮を感じたものだが、SDは意識的にそうした状況を作り出すための術というか、ルールのセットであり、それを採用することで実際にある仕方で哲学「する」ことができるという具体性がある。哲学「する」ということでは、この実践においては、哲学「研究」の「ウンチク垂れ」が厳禁されているということが有効に働いている(実際、私も「ゲンゴコウイロンテキに」とか「二宮尊徳が...」などと途中まで口走ってしまったのだ

が、幸い自制できた)。「具体性」というのは、「ステートメント(言明)」という形で思考・発言の要旨を司会が紙に書き出すという作業が組み込まれているために、思索にとまらないがちとされる「とりとめのなさ」がかなり防止されるゆえである。

哲学とは、専門的訓練を受けてなければ口出しできないようなものだ、といういわば「密教的」な哲学観。そういう見解が、現場での「哲学すること」を妨げてきたのだとすれば、SDは臨床哲学にとってかなり強力な持ち駒とってよい。「ソクラテス的」とは、誰にでも関係があり、論じることができるテーマ、スタイルとしての哲学、というより本来的な「顕教的」哲学観を体現する形容詞だからである(もちろん、仏教と同じで最終的には顕密のどちらがよい、ということはいえないことは言うまでもない)。

ところで、私は半年間専門学校の看護科で論理学と倫理学を講じた。そして生徒たちの間に、「...とは何か」というテーマ群について意外なほど関心が高いのを実感した。それも、そうした問題について「昔の偉い人がどういっているか」という関心の持ち方ではない。私は、毎回講義の残り時

間に生徒たちに意見を書いてもらい、その一部をまた(匿名で)プリントにして配布したのだが、それを手にした生徒たちは大変興味深そうに読みふけていたのである。おそらく、彼らは各々内にそうした関心をくすぶらせながら、同世代の友人たちとその関心を共有する回路を見出せていないのだ。それは現代の人間関係のあり方から醸し出される雰囲気、それとも教育制度のためなのか。いずれも陳腐な言い方で恐縮するほかないが、そもそもここで解答できるような問題ではないだろう。それにしても40人程度のクラスでは「討論会」にしても実施するのはかなりの困難が予想されたのは事実である。

現行のクラス編成では、多くても10人程度で、という制約のあるSDではさらに実施は困難であろう。しかし、私は期待している。これから私たちがSDを「やり込んで」いくうちに、こうした制約を形作っている現行の教育制度への対案を示せるような足場が形成されていくようなこともないとは限らない、と。

(まじまひろし・博士後期課程)

大北全俊さんより

自ら事例を出したのものとして、その感想を述べます。

その事例は、自分ではすでに整理のつけられた物語だと思っていたので、それを具体的に話すだけだと思っていました。しかし、「具体的に」語っていくうちに、自分でも思わぬ展開になっていくのを体験しました。というよりも、具体的に語っていくうちに、自分では忘れていたような出来事

が実はすごく重要な意味を持っていたことに気づいて自分でも驚いたのです。それを簡単に「自己発見」と言えなくもないのですが、すでに「終わっていたはず」の物語がその忘れていた出来事を思い出したことで未だ「終わってはいない」物語であることに気づきました。あるいは、自分の物語を「発見した」というよりも、「新たに作り出した」という感じもします。

漠然と頭の中にある出来事を具体的に言葉にし、しかもそれを他者と共有してゆこうという作業は、単に語る人から聴く人への伝達ではなく、創造行為としてまさに共同作業という感じがありました。

ただ、共同作業という点では、反省点がないではありません。先に自分で自分の事例を語りながら「新たに作り出している」と述べましたが、ということは別様にも事例を作り替えられるということです。この「作り替えられる」過程こそが共同作業の故であり、もし本当に僕の手を放れてその事例が共同作業の俎上にのぼったならば、自分たちが進めている作業そのものについてのダイアログ、つまりメタ・ダイアログが発生したのではないかと思います。そして、その場が議論＝作業の進め方を巡る何らかのポリティクスが作動する場になったのではないかと、そして、その「駆け引き」はダイアログにとって本質的な出来事ではないのか。時間の制約のために僕からの「語り」が中心になり事例の他者との共有が不十分だったため、メタ・ダイアログは発生しませんでした。もし出来るなら、次はそれが発生するほどの作業をしてみたいと思います。

(おおきたたけとし・博士後期課程)

「聞き取り」としてのセクシュアリティ ——日本倫理学会におけるその位置—— セクシュアリティ研究会から

栗田隆子

大阪大学、吹田キャンパスで開催された「日本倫理学会」(以下略して「日倫」とする)の二日目に「ジェンダーとセクシュアリティ」というテーマで発表の場が設けられた。ここで問題にしたいことは、日倫という「場」でセクシュアリティ(ジェンダー)について発表するという意味についてである。それは、社会学や心理学のフィールドではなくなぜ倫理学にセクシュアリティが入り込んできたのか?という問いでもある。それに対して、時代の流れという答えではなく、「日倫」という場をもまたひとつの現場として捉え、そこでセクシュアリティがいかに扱われるのかということ、その意味を考えてゆきたい。

つまりセクシュアリティは学問で取り上げる「べき」という捉え方ではなく、「日倫」というひとつの「場」で取り扱われたセクシュアリティのあり方を捉えようという試みである。

分科会でのパネリストは大阪府立大学所属の森岡正博氏と東京都立大学所属の江原由美子氏であった。森岡氏の発表は「男性がフェミニズムの問いかけをどう受け取るか」という題目で行われた。フェミニズムの主張とは、もはや一枚岩として語れるものではなく、この時代においては男女とい

う違いでなく「戦うもの(戦おうとするもの、と会場で言い直す場面があったが)と戦わないもの」との違いだけがあると主張した。その違いは性差によるものでなく最終的な主体としての「個」による違いであるとし、その「個」からはじめることによって、性(セクシュアリティ・ジェンダー)についての「対話」が生まれると主張した。

他方、江原氏の発表は社会学の立場から、「ジェンダー」と「性支配」--「構造と実践」の観点から という題目で発表された。「個」の立場から性を語ることの可能性を説くよりも、社会構造のなかにマクロ・ミクロのさまざまなレベルで「男女」という「ジェンダー」そして、その性の「非対称性」がすでに存在してしまっているということ、そして森岡氏の主張するようなその語るべきはずの主体である「個人」もまた、それこそ個々の身体、感情(無意識、とでも表現できるような)のレベルでその社会構造の中にあるジェンダーバイアスに色づけられた「実践」を繰り返しており、繰り返すことでそのジェンダー構造を強化してしまう状況があることを説明した。

この二人の発表において通奏低音として流れていた問題とはそれぞれの、わたしやあなたが「主体」として、「セクシュアリ

ティを語る」とはどのようなことなのかという問題であった。その問題とは、セクシュアリティに臨む哲学研究会のなかでも何度も取り上げられてきたことであった。すなわち、「誰が誰に向かって」話し、聞くのかということが、つねにセクシュアリティを語る際には問われること、またその話しをすることにより、人間関係においていかなる磁場が生まれるのかを追わなければならないということでもある。

さて、以上のことを踏まえつつ「日倫」というひとつの〈場〉でセクシュアリティのあり方を捉える意味について考察してゆきたいと思う。

私は会場のやりとりを聞いていてかなりの「不安」を感じた。それは、さきほどの問題提起(セクシュアリティについて主体としてどう語るのかという問題)の延長線としてセクシュアリティについて女性はあまり語ることがなかったのではないか、という森岡氏の指摘に対し、江原氏が、セクシュアリティを語っている・いないを一体だれが決めているのか、という反駁をした

うえで、具体例として、レイプをされたある女性がその暴力的な性行為に際し「感じてしまう」身体に対して憎しみを抱く場合があるとし、そのような女性に対し性的主体としてセクシュアリティを語るということを、もしくは語るべきであると要求することは不当なのではないかという発言を行った時に、であった。これらの発言から見られるように、発表の中盤は森岡氏から提示された男性の側の性的ファンタジーについての発言など、ジェンダーというよりセクシュアリティについての議論が活発になされていた。その直後に、それらの発言を受けてフロアーから「もっと、婦人公論4冊(注:おそらく性的な「体験談」としてこの比喩がなされたと思われる)を読んだような話ではなく、セクシュアリティの話をするときには政治や戦争等、構造的な視点を持って語るべきではないか」という意見が出たのだった。

さて、私自身がこのやりとりのなかで感じた「不安」とは何か。それはセクシュアリティについて「誰が誰に向かって」語るのか、という問題がこの「日倫」という〈場〉でも独特の仕方で噴出したように感じられたからである。あの日倫という〈場〉では、セクシュアリティを語る際に生じる磁場の領域があいまいになる、もしくはならざるをえなくなるのではないかという疑念が生まれたのだ。

具体的に私自身についていえば江原氏の話に自分を仮託して聞いている側面があった。つまり彼女の話がどのように受け取られるのか、その話しの行方、宛先が気がかりであった。それがはっきりしなければ、彼女の話すらある種の性的幻想(つまり、その女性の気持ちの痛みを捨象して「からだは、やっぱり感じるんだろう」とでもいうような)を無批判に支えるものとして、つまりは(江原氏が指摘するような)既存

の「構造」のもとでの反復された「実践」のパターンの一つとして聞き取られるおそれがあると感じたのである。江原氏の話、または森岡氏の話には、なぜか思いがけない場で性について語る、もしくは「聞かされる」という印象があった。あの場はまさに「セクシュアリティについて語る場」としての位置づけがなされているにもかかわらず、である。「話してほしい」という期待感もあればこそ「話がなされてしまうのか」という不安感も同時に強く生まれ、それらがなまぜになっていた。その両方の感覚が -- 強いていえばやはり不安の方が強かったが -- どこから出てきたか。それは個人の「体験談」がこの「日倫」ではどういう位置づけになるのか、という問題なのではないか。

分科会とはテーマに沿ってある事柄が語られる。それは一見「中立」的な、個々人の利害や感情を出さずにすむための方策、と思われる。しかしセクシュアリティについて「真摯」に語ろうとすればするほど、それは(婦人公論的、と会場から発言されたような)「体験談」に近づいていく部分がある。しかしその「真摯」さが同時に、「婦人公論4冊分」の体験談としてのみ「聞き取られる」危険がある。むしろそういう「聞き取り」のありかたの優位性ゆえに、セクシュアリティ -- それもまた、ある文化的な枠組みに囚われた概念であるという批判もある -- については特に女性からは「語りにくい」または「語られていない」ものとされてきたのではないか。「よりよい」セクシュアリティについての「語り」をするだけで、セクシュアリティの「語り」は「よりよい」ものとはならない。その「語り」を「聞き取る」という実践においての、「構造」とは、また「個」とは何か。それはまた「主体」という問題とどうかかわっていくのだろうか。

森岡氏と江原氏のやりとりに対する、フロアーの投げかけは、まさにその決められた枠組みとしての「聞き取り」に回収される危険を敏感に感じとった発言であり、語りを一旦ストップさせたことは、まさにあの場の「聞き取り」を「中立」なもの、つまり安全に聞いてもらえる語りに引き戻す働きをしたのではないか。それと同時にセクシュアリティについて語る際の宛先が不明瞭であることの危うさをも際立たせたのだ。そして私自身は「中立」つまり個々人の利害や感情とは直接には結びつかないことが前提とされる場で、セクシュアリティについて語ることの「不安」を改めて感じたのだった。最初の話に戻れば日倫という場について私が感じ、捉えていたものは先ほどから何度も用いている「中立」という言葉で表現できるだろう。つまりここでの「中立」とは、個が不容易に引き出されず、真摯に話しをすればそのまま透明に聞き取りも為されることが前提とされたものであり、それゆえその場にいる者への「安心」という感覚を生み出すという働きの前提をも指す。しかし江原氏の取り上げた事例に対しその中立性を求めることは、一方ではその中立性を成立させる前提によって彼女の発言を封じてしまう事態につながる。しかし他方、そのような「個」を出すことはある枠組みでの「聞き取り」の暴力に晒されることにもなる。

あの発表のなかで個を出すことと、出さないことのせめぎあいを感じたのは私だけだろうか？この「中立」というものが語られる内容によっては自明でも、保証されたものでもないということを改めて認識する上でも「時流」という理由以外に「日倫」という〈場〉にセクシュアリティが入り込むという意味が見いだせるのではないだろうか。

(くりたりゅうこ・博士前期課程)

10月15・16両日にわたって、大阪大学にて第50回日本倫理学会が開かれた。その場で臨床哲学に関する初めての発表として、武田保江・本間直樹両氏による共同研究発表(「失語症とその看護が問いかけるもの——他者理解とコミュニケーションについての臨床哲学的視角」)と、中岡成文・鷲田清一両氏による共同研究発表(「臨床哲学というプロジェクト」)が行われた。

武田・本間両氏の発表に関しては概ね好意的な質問が出され、とくに福祉関係の研究をされる方から発表後有意義な示唆をいただいた。一方臨床哲学の理念に関する中岡・鷲田両氏の発表については、臨床哲学に対する様々な疑問が浴びせかけられた。そのなかでこの

れる。他者の言葉はさしあたりは未完成でつたないものであることが多いが、それでもそこから他者と共に問いを引き出す感受性が必要とされる。「高校生の文章」であろうがなかろうが、そこに問うべき問いを見出すことができるかどうかは、むしろ読み手の感受性の問題なのではないか。メチエという媒体が意図しているのは、既に完成し何の疑問点もない「研究成果」なるものを提示することではなく、未完成でかつヴァルネラブルなものをあえて出し、読者と共にさまざまな角度から批判的に補い合うという共同作業である。一言でいえば「臨床的なもの」でもっとも重要なのは、可謬的でフィードバック可能な成果なのである。

臨床哲学的余白

メチエに関して(某大学院生より)「高校生の書くような文章が載っているけれども、それが臨床哲学なのか？」という質問があった。それに対してメチエの制作者としてこの場で応答しておきたい。

まず何よりも残念なのは、この発言が内容に敢えて関わろうとしないという点で無内容であることだ。「高校生の文章」という規定によって何がそこから排除されるのか?——それを問うことからまず始めなければならない。

今回の特集である哲学プラクティスでは様々な経験の中で感じ取った些細な疑問や問いなどを他者の声から聞き取ることが重視さ

そもそも哲学をすでにできあがった成果としてしか評価しない者にとって、哲学の実践とはいかほどの意味があるのだろうか?「子どものための哲学」というものがヨーロッパで試みられている。(それについては寺田さんの文章を参照のこと。)それをうけて臨床哲学では中等教育における哲学の教育の可能性を模索している。そうした「教育」の場では、高校生などに哲学の知識を押しつけるのではなく、彼ら/彼女らの生きるその場から問いを紡ぎだしていくことが重視される。しかし、大学という哲学の専門的教育によってある人がある特定の場所で感じる問題というものに対

する感受性を擦り切らせてしまうことは少なくない。我々臨床哲学のメンバーも例外ではなく、そのように鈍磨した感性を、専門外の場所でふたたび発見することは決して無駄なプロセスではないだろう。

さて今回のメチエの特集は「哲学プラクティス」である。我々は海外の流行を追いそれを輸入することを意図しているのではない。むしろ我々は臨床哲学と併走する様々な試みと手を結び合って常に進化しつづけることを目指すだけである。先の中岡・鷲田両氏への反応をみてもそうだが、臨床哲学についての議論は現実の問題に関わる前にあまりにしばしば理念をめぐるそれに集約してしまう。が、哲学プラクティスのように既に10年以上もかけて現実に活動を続けていく人たちの姿を見て、今切実な問題として我々の前にあるのは、我々にとって実際に何ができるのか、実践可能なものとしてどのような選択肢があるのかを具体的に考えることだろう(むしろ「理念なるもの」は後からついてくるものなのかもしれない)。

差し当り、臨床哲学は少なくとも次の三つの可能性に対して開かれているだろう。

1 : 哲学プラクティスが大学などの研究機関に属さない人たちによって営まれているように、臨床哲学もまた、臨床哲学を学んだ者が、所謂「研究者」としてではなく研究機関の外で活躍するという可能性。(例えば、高校生・大学生・社会人を対象にした哲学セミナーを有料で開き、ソクラティック・ダイアログや哲学コンサルタントを行うなど。)

2 : 既になんらかの職業についている者が一時的に考える機会を得る場所として臨床哲学に参加し、その後自らの実践の場に戻るという可能性。(例えば、看護職、教育職などに就く人たちが研修期間として一時的に大学で学ぶ時間を得られるようにすること。あるいは、1の哲学セミナーに参加するなど。)

3 : 哲学研究者が医療・看護・福祉・教育などの専門家と共同に研究する可能性。(例えば、今回の日本倫理学会での失語症についての武田・本間の共同研究など。)

このように、臨床哲学は《大学の外》《職業の外》《専門の外》の三つの意味で「外」に開かれた可能性をもつ。この三つは矛盾するものでないし、臨床哲学に参加する者がそれを各自選び取るものであるが、そうしたことに耐えうる基盤を当研究室として準備しなければならない。

そのためにもやはり、ヨーロッパの哲学プラクティスを試みる人たちが直面している様々な実際上の問題から学ぶことが多いだろう。そしてソクラティック・ダイアログや哲学カウンセリング/コンサルタントにしても、それを臨床哲学が全く同じ仕方で模倣するのではなく、それを我々流に改変してゆかなければならないだろう。それは、「ダイアログ(dialogue)」という名の示すとおり、ごく日常の場面でもロゴスと議論を重んじる文化に対して我々が真摯に向き合うことを意味するはずだ。(編集者)

(次回のメチエ2000冬の号特集は、「セクシュアリティ」です。)

臨床哲学のメチ工 Vol.4 1999秋の号

編集：本間直樹

協力：大北全俊 + 高橋綾 + 堀江剛

+PowerMacG3

大阪大学文学部 臨床哲学・倫理学研究室

560-0043 大阪府豊中市待兼山 1-5

homma@let.osaka-u.ac.jp

<http://bun70.osaka-u.ac.jp/>